

第2章 ライフヒストリー

2-1 名寄市智恵文

2-1-1 学校生活、冬山造材、青年団活動

開催日：2020年7月15日 場所：今藤正美さん宅

お話：今藤正美さん（昭和5年生まれ）

聞き手・編集：青柳かつら（北海道博物館）

○智恵文への入植と家の歴史

青柳：今藤正美さんはいつの代から智恵文に入植されたのですか。

今藤：じいさんの代だ。

青柳：おじいさんのお名前は？

今藤：今藤弥作（やさく）だ。55歳で死んでいる。富山県の川西・砺波出身だ。そこにはまだ本家が残っています。今でも顔を出したり、毎年北海道の特産物を送ってあげたりね。

青柳：北海道で新しい土地を手に入れて農業を始めようと、開拓に夢を持って来られたのでしょうか。

今藤：そうですね。名寄の街にはちょっと（住民が多く）おったけど、農業をするためには、親戚の人が先に来ていて、その人を頼って入植した。

青柳：よく聞きますね。始めは親戚を頼って、農家の奉公をさせてもらって道具を揃えたりして、ですね。

今藤：そう。明治の末だった。その資料は持っている。父親が三郎だった。上に姉が2人おったものだからその名が付いた。60歳の時にバイクで転んで内出血で事故死した。ホンダのスクーターみたいなバイクだった。

青柳：ああ、原付でしょうか。お父様は社会的に出歩いておられたのでしょうかね。

今藤：弥作が入ったのは北山ではない。中央だったか。

弥作が死んだとき、三郎はまだ16～17歳だった。地主に「ろくな百姓になれない」と（中央から？）出されて、山のほうの土地にずっとおって。北山のほうだった。小作だったが。

青柳：そうですか。三郎さんもかなりご苦労していますね。まずは5町歩の土地を開いて、でしょうか。

今藤：うん、自分で開いた所もあるし、開いた所も含めて（土地を）買ったりね。

○北山の開拓

今藤：北山は元道有林だった。農耕地という名前で農家に払い下げて開拓して使いなさいというものだった。言ってみれば、安い年貢で使わせていたという所なんです。

青柳：北山ですから、傾斜もきつかったのではないのでしょうか。開拓は大変でしたね。

今藤：そして石が出る所だった。石が出る所は農地としては（作物が）よくできるんです。仕事の邪魔にはなるけれど。

青柳：ああ、山の土ですね。開拓してからすぐは、作物の出来はいいといいますね。

今藤：そうね。大体焼いて。

青柳：ああ、焼き畑で、ですね。

今藤：だから地力がかなり残っているの。

僕は森林組合長を10年位やっていた。組合の職員に用地を買う時に教えているのは、「天塩川の南は地力がない土地である、北側は地力がある」ということです。北は木の材質も良い。立木ごと土地を買う時に、こうしたことを教えたものだった。

青柳：北山は水に苦労したのでしょうか。

今藤：そうでもない。みな川水（かわみず）で生活していた。天塩川の支流だ。

○天塩川の支流

今藤：今はわからないが、当時はアキアジが上がっていた。上流で産卵していた。私は釣りは好きでないからやらないけど。当時は好きな人が密漁しているの。近くのおじさんが夜寝ないで捕ってる訳さ。

青柳：当時はそうしたこともあったのでしょうか。

今藤：アキアジが可哀そうだから密告してやるかな、と言った。そしたらカマスの袋に5~6匹入れて背負ってきたこともあった。

青柳：それは当時の食生活では、魚が美味しかったということでしょうか。

今藤：美味しかったし、当時は魚というとそんなのしかなかった。釣ることが好きな人は捕っていた。食べるのに塩漬けにしておいたりなどよくあった。悪質な人は、魚卵だけ捕って捨てたりしていた。

青柳：良くないですね。クマがついたりするんでしょう？

今藤：そうね。でもそれぞれ内緒でやっているから（なかなか止めない）。

○智恵文小学校での学校生活

今藤：自分は、（初等科から）北山小学校には行ってない。自宅から5km位の距離がある、智恵文（尋常）小学校に通った。近所の同級生に連れられて一緒に通学したので、智恵文小学校の方がよかった。

青柳：ということは、北山から智恵文小学校まで歩いて通学されたのでしょうか。

今藤：そう。

青柳：それは足が鍛えられましたね。

今藤：智恵文では（高等科を除くと）小学校6年生までしかなかったけど、そこから上は金持ちの家の子どもは、昔の旧制中学校に通った。当時は男女共学ではなかった。

あまりお金のない家の子ども達は、授業料があったけれど尋常高等小学校へ通学した。

青柳：尋常高等小学校は、2年ないし3年でしたでしょうか。

今藤：2年だね。

青柳：こちらは2年間だったのですね。

今藤：生活が大変な家の子どもは小学校6年間だけで、社会へ放り出されたり、家の仕事を手伝うことが多かった。

青柳：義務教育だけを終えてですね。



昭和期の智恵文尋常小学校・尋常高等小学校

○子守り

今藤：小学校6年間を卒業したら、どこかへ「守っ子（子守り）」にやられるのね。

青柳：子守りですね。奉公ですね。

今藤：だから子守りに行って、「学校へ行きたい」となると、その家からは「子どもを負ぶって行きなさい」と言われたものだった。

青柳：背中に子どもを背負ってですね。

今藤：そうしたら、先生が特別によく見てくれて「おむつの取り換えは教室の中ではなく、廊下でやりなさい」などと指示をした。

青柳：そうですか。

○軍事教練、学徒出陣

青柳：今藤正美さんは、智恵文の尋常小学校と尋常高等小学校に行かれたのですね。

今藤：そう同じ校舎でね。僕だけさ、兄弟でそうした教育だったのは。後の兄弟はみんな大学に行ったりしている。あははは。

青柳：今藤正美さんは何番目だったのですか。

今藤：長男だったの。

青柳：ご長男ですか。それは親御さんも地元に残って後を継ぎなさいというお考えだったのですね。

今藤：ちょうど尋常高等小学校を卒業した年が終戦の年（1945年）だった。

青柳：ということは、当時は国民学校だったのでしょうか。

今藤：（友朋学級文集には）その辺の歴史も書いてあります。

青柳：そうしますと軍事教練をやったりですね。

今藤：軍事教練もやったし、同級生が何人かが少年兵で（戦争に）行ってるのね。

青柳：ああ、もう出陣しておられたのですね。

今藤：俺も飛行兵になりたいと言ったら、「特攻隊になるのも国のためだけれども、残って食糧増産する

のも国のためだ」と言われた。

青柳：お国のためだよ、ということですね。

○遺族会の活動のきっかけ

青柳：もしかして今藤正美さんは少年期のそうしたご経験もあって遺族会の活動をされているのでしょうか。

今藤：遺族会は父親の弟に関係したこと。父親の弟は農家の仕事をして、土地を少しもらって、(生家である本家からは) 独立してやっていた。お嫁さんが「農家は嫌だ」と言い始め、(弟は) 炭鉱へ行っていた。

暗くなってから自分(今藤正美さん)が父親と2人で秋の農作業をしていたら役場の人がやってきた。

「ここは今藤いさおさんの本籍地ですよ」と聞かれる。父が「ああ、来たな」と言う。自分は「何が来たのかな」と思ったが、「おめでとございます」と言われる。召集令状だった。

青柳：あら。

今藤：智恵文の郵便局まで2km程の道だったが、自転車で走って行って、郵便局の電話を借りて、歌志内の弟の所に連絡をした。それが11月頃だった。

それからすぐ戦争に行って、ニューギニアのビアフ島(?)で翌年の7月に戦死している。

青柳：痛ましいですね。

今藤：女の子が一人おったんだけど、親が戦死したら炭鉱の住宅から出されてしまう。給料ももらえなくなる。うちが本家であったので、その子を貰い子として引き取った。

1~2年おったんだけど、お嫁さん(女の子の母)は農家を嫌いで(よその土地へ)行ってしまった位なので、あまり(今藤正美さんの)家の農業も手伝いたくはないらしかった。そこで、子どもを連れて、おじさんの遺骨は本家だからと言って置いて出て行った。そうして樺太の引き揚げ者だった警察官と再婚したのです。その2年後に遺族年金が出る仕組みだった。その子は実子として届けていたから、その子は遺族年金をもらうことができた。

青柳：弟さんのことは痛ましかったですね。

今藤：父は(自分は)本家の兄なのだから、生きているうちは遺族会で活動すると決めた。「俺が死んだらおまえは長男なんだから頼むぞ」と言われて、活動を引き継いだ。去年の道の戦没者追悼式でね。

青柳：今藤正美さんをテレビでお見掛けしました。大きな式典でした。

今藤：父親の遺言で引き継いでいる旨、挨拶をした。

○高等科卒業時の家の経営

青柳：国民学校の高等科を卒業されて、今藤正美さんは山の仕事に行かれたのですか。

今藤：うん、冬はね。

青柳：冬なのですね。冬山造材ですね。

今藤：夏は農家の農作業を手伝ったり、青年学校があって、それに行ったりしていました。しかし青年学校では、勉強するよりは、家で農作業するのが忙しかった。

青柳：その頃はもう終戦後ですものでね。

今藤：そう、終戦後だった。学校卒業の年の授業は、終戦前の3~4か月はみな軍事教練だった。

青柳：その頃の農業の規模はいかがだったのでしょうか。

今藤：馬が1～2頭いてね。

青柳：馬2頭といえば結構な規模ですよ。5町以上はあったのですか。

今藤：父はね、農業をやるよりも大工さんが好きで、農作業の段取りをつけたら、卒業した自分（今藤正美さん）に仕事を任せて、鋸とかんなを背負って、大工の仕事に行ってしまった。

青柳：そうですか。職人さんですね。もしかして、このあずまやは今藤正美さんの作ですか。

今藤：いや、これは僕の弟が作ってくれた。父が大工をしていたので、父が作った納屋や倉庫がまだ残っています。

青柳：そうなのですね。それは、単にお好きだというだけでなく、家を1棟建ててしまうような本格的な大工さんだったということですね。

今藤：でも僕は出かけ仕事が嫌いで、家で農業をやったり、冬は造材山に行ったりね。

青柳：当時の農業はどんな様子でしたのでしょうか。ジャガイモでしょうか。

今藤：やっぱりジャガイモが主力だね。販売作物では亜麻を作ったり、だね。

青柳：亜麻はロープにしたなどと聞きます。

今藤：そう、名寄に亜麻工場があって出荷しておったのね。

青柳：ああ、帝国製麻でしょうか。

今藤：あとビートですか。カボチャ、コメ。

青柳：ビートですね。当時もカボチャがあったのですね。

今藤：ありましたね。お米はほんの少し食べる分を作っていました。

青柳：お米づくりは今年の学習会で色々とお教えていただきました。北山ですものね。ため池の水を使っておられたのですか。

今藤：小川（こがわ）があってその水を引いていた。

青柳：小川の水ですね。温めてでしょうか。

今藤：うん。長い水路を通ってくるうちに多少温まってきたのだろうと思う。

○小川でのエビとり

今藤：よく「水路の草刈りをしなさい」と言われて手伝った。それは水が通る所を太陽が当たるようにするためだった。

青柳：昨年教えていただいた「カワエビを手拭いですくって食べた」という小川ですよ。

今藤：そのことも文集に書いてあるのではないかな。

青柳：沢山いたし、おいしかったのでしょうか。

今藤：家から出る時は手拭いで作った風呂敷を一枚持って行く。学校に帰って農作業を手伝うのが嫌だから、友達と「川岸で遊んで帰るべ」となる。川にいる魚を食べておやつ代わりにした。一枚しかない下着だから、濡らして帰ると遊んできたことがばれてしまう。

みんな下着は置いておいて裸で遊んだものだった。

青柳：ああ、昔は川ではみんな裸で泳いだとよく聞きます。暑い時期ですね。

そして得意な子は泳ぐだけでなく、エビも捕ったのですね。

今藤：エビは結構川っぶちの草が生えている所にいる。

青柳：ああ、草が生えていて影のある所にエビはいるのですね。

今藤：そういう所で、手ぬぐいの両端を持って。

青柳：2人1組などで追い込むのですね。

今藤：そして家からこっそりマッチを持って来てね。ヤナギの枝を燃やして、茹でて食べたり。

青柳：それは戦時中ですから、物のない時代ですね。

今藤：そう。

○万引きの思い出

今藤：店に行ったらお菓子なんて売っていなかったもの。

ここ(友朋学級文集)にも書いたけど、(学校帰りに友達が)お店に寄ってノートかなんか買うと言う。3人で、買い物が終わったから「帰るべ」と言ったら、友達がポケットから缶詰、クジラ肉の大和煮を出す。

青柳：あら。

今藤：それをいつも遊んでいる川っぶちの所で、開けて食べたのがおいしかったのを覚えている。

青柳：おいしかったでしょうね。

今藤：でも家に帰ったら、父親がそのことを知っていた。どこかで聞いたんだね。電話もない時代によくわかったと思う。今でもなぜわかったかわからない。

青柳：地域に何軒もないお店で、店番の人もいたのでしょうか。

今藤：父は別の店によく自転車で行ってた。その店にはよく行っていなかったはずだ。

どっかから情報が来たんだな。

青柳：やっぱりわかってしまったのですね。悪いことはできないということなのでしょう。

今藤：さんざん怒られてね。次の日にもう一度、別の友達に「行け」と万引きさせたが、もたもたして店の人に捕まってしまった。「今藤が行けと行ったから行った」と告げ口されてしまった。

青柳：それは戦争前、昭和12年に入学してからですね。

今藤：その時の友達の1人は、今、名士バスの社長をやっているのがその息子。

青柳：ご商売の上手な方だったのですね。

今藤：その3人の中の1人は、商売をやって家も裕福だったからね。学校も昔の(名寄)農業高校を出て農産物の検査員をやっていたからね。死ぬまで付き合った。死んだ後はよろしく頼むよと言われた。故人たつての願いということで、別の適任者もいたようだったが、葬儀委員長を引き受けた。

青柳：それは本当に一生の友達ですね。

今藤：もう1人の人も、去年札幌で亡くなった。

青柳：人が亡くなるのは地域の損失ですよ。

今藤：最後まで仲良くして付き合っていましたよ。

○当時の学校生活の写真

青柳：昭和14年智恵文尋常小学校3年生のですね。

真ん中に段があって沢山のお人形さんが飾られています。一番上がお内裏様とお雛様でしょうか。桃の節句の風景ですね。

今藤：上の人形（お内裏様とお雛様）は学校が用意してくれるのです。それ以外のお人形さんはそれぞれの家から持ち寄ったものです。お雛まつりの日、3月3日に撮った記念写真なのです。

青柳：なるほど、そうなのですね。

今藤：私もいますよ。端の方にいるかわいい子ですよ（笑）。

青柳：男子はみな学生服です。今藤正美さんの頃はもう洋服でしたか。

今藤：前に5つ位ボタンがついたね。

青柳：詰襟ですね。昭和14年ですから、その後と比べるとまだ物資のある、いい時代ですね。

今藤：その時は3年生だろう。



昭和14年智恵文尋常小学校3年生 記念写真

○冬山造材の飯場の暮らし

青柳：今藤正美さんは卒業してすぐに造材に働きに出られています、どのような暮らしでしたか。

今藤：布団は自分で持って行かなくてはならない。

青柳：ああ、夜具を持っていくと聞きます。わら布団ですか。

今藤：いや、普通の布団。綿布団だ。途中から、馬が行かない道になるので、布団を背負って行かなければならなかった。自分は身体が小さかったから、敷き・掛け布団、毛布1枚なんか持ったら重くて背負っていけない。その他に、食べるおかずなんかも持っていかなければならない。

青柳：どんなおかずがあったか覚えておられますか。

今藤：ほっけのぬか漬けだ。

青柳：保存がきくようにぬか漬けにしたのですね。

今藤：朝起きると川に行ってちゃちゃっと洗ってストーブに載せてね。

青柳：ああ、じゅうじゅうと焼くわけですね。おいしそうですね。

今藤：でもあんまり焼きすぎると。

青柳：焦げちゃって、ですね。

今藤：大体みんなそんなものが多かったですね。朝ご飯を食べて、飯場では大きなおにぎりを作ってくれ

る。それを持って現場に行って食べた。

青柳：当時、朝は何時位だったのでしょうか。

今藤：薄暗いうちには起こされたな。

青柳：では、6時位でしょうか。

今藤：6時には起こされたな。

青柳：そして飯場では自分の場所があてがわれて、そこにずらっと並んで雑魚寝でしょうか。

今藤：真ん中を通路にして、あちこちにストーブを置いてさ。頭を並べて寝るんだ。むしろ1枚をもらって敷き、そこに1m幅位の布団を敷いてね。

自分は身体が小さかったから掛布団だけで、敷布団は持って行かなかった。敷布団を二つ折りにしたら丁度寝ることができた。

青柳：飯場の中はやはり寒かったのでしょうか。ストーブもよく燃えなかったと聞きます。

今藤：そう、ストーブも夜中には消されちゃってね。

青柳：寒いでしょうね。

今藤：でも、なるべく消さないように火の番をしてね。気が付いた人が焚いたりなんかして。

青柳：そうですか、では寒くて寝られないという程ではなかったのでしょうか。

今藤：それはあんまりなかったね。

今藤：「今日うんとしばれるぞ」と言ったら、その部屋の部屋頭のような人が「火をもっと焚け」と言ったものだった。いろいろ号令をかけたたり怒ったりさ。



飯場内部の様子(昭和22年、士別市朝日町)(朝日郷土資料室所蔵)

○冬山造材の仕事：道付けと丸太運び

青柳：最初はどんな仕事から始めましたか。

今藤：山子さんが伐った木を馬が運ぶ道まで出す仕事だった。

青柳：ああ、「出す」仕事ですね。

今藤：入った当時は、道路を付ける仕事、木の枝なんかを整理して。

青柳：「道付け」ですね。

今藤：そう。2年位経ったら「バチ乗り」だった。手で背負って歩けるような小さなバチに3人位の組で。

青柳：大きな（馬を使った運材用の）バチバチですか？

今藤：いや担いで歩けるやつ。

青柳：ああ、小型のものだったのですね。

今藤：うん。そうして狭い道を付けておいてね。替わり番で（交代しながら、そのバチを）背負って歩いて、丸太の所まで持って行って、小さい丸太なら2本ぐらい、大きな丸太ならば1本積んで、急な坂を3人ですべらせて下に降りて行った。

青柳：ああ、それは人力バチというものですか。

今藤：そう、人力バチだ。

青柳：馬ではなく人力で、ですね。その代わり、馬では行けない、険しい所に行く（丸太を運ぶ）のでしょうか。

今藤：伐った木を馬が来られる所まで出すわけさ。

青柳：そうなのですね。そうした点では、（馬搬よりも）きつい、危ない仕事だったのでしょうかね。

今藤：かなり危ない。

青柳：そうなのですね。

今藤：私は身体が小さかったものだから。後ろからガンタで押して出すんだけど、（自分は）バチの上に乗って運転をしたものだった。

青柳：ああ、カーブの所で曲がる方向を指示したりですね。「舵をとる」と言いますか。

今藤：そう舵をとる、ね。それを専門にやらされた。

青柳：はあ、それはすごいですね。

今藤：舵を誤って、木にぶつかったりさ。（バチの上に乗るときは）「どん」と（深く）座らないで、立て膝で座る。

青柳：立て膝ですね。（危険な時は）パッと逃げられるようにですね。

今藤：逃げられるようにね。

青柳：それだけでも危険さがわかりますね。

今藤：向こうの家（自家）にまだバチが残っているのではないかな。

青柳：そうですか、その頃は「ご卒業して2年」ということは、17歳位ですか。

今藤：いや、まだ2年たっていなかった。

青柳：初めは2年位、道付けでしたよね。

今藤：それから、丸太運びとバチ乗りをして。

青柳：その頃のご年齢というと？

今藤：二十歳かな。

青柳：二十歳ですね。一番お元気な（やんちゃな）頃だったかもしれませんが、よくやられましたね。

○どぶろくと花札

今藤：デンプンを原料にして、どぶろくを作るんですよ。

青柳：それは飯場で、ですか（笑）？

今藤：うん、飯場で作ったりね。家で作ったのを1升瓶に入れて背負って来てね。

青柳：背負って来たのですね。それは身体を温めるためですか？ 楽しみで？

今藤：お酒だよ。あれは随分飲んだね。晩になったらね。

青柳：晩酌ですね。

今藤：晩酌代わりにね。仲間で騒いでね。

青柳：それを楽しみにして昼間働いたのですね。

今藤：そう、花札を持って行ってね。トッパ（？）やったりさ。男ばかりね。

そしてご飯炊きのお姉ちゃんが何人かいるからさ。

青柳：ああ、飯場長とか飯場の人が働いていますものね。

今藤：そう、そして夫婦でご飯炊きに来ている人もいるわけさ。

青柳：飯場長夫婦ですね。

今藤：うんうん。

○ランプと魚油の明かり

青柳：（飯場は）花札をやるほど明るいのですか？

今藤：ランプをつけているからね。

青柳：なるほど。ランプはどんなものでしたか。ホヤのついた？

今藤：石油ランプね。ホヤのついた。

青柳：割といいランプですね。

今藤：そうですね。

青柳：当時は昭和25年頃のことでしょうか。

今藤：石油はね、業者が上手に見つけてきて、明かりにしていたね。ランプでね。

家にいた頃（学校卒業前、昭和20年以前？）は石油が手に入らなくて、ニシン油を大きめのね（器に入れて？）。

青柳：ああ、聞いたことがあります。魚油というものです。

今藤：そう魚油ね。油に木綿の細い芯を入れて、そこに火をつけた。

青柳：平たいお皿ですか。

今藤：ホタテガイの貝殻だった。そこに油と芯を入れて。

青柳：私も門馬さんから似たお話を聞きました。それは緬羊の毛で糸紡ぎをする時の明かりのお話でした。門馬さんの思い出では、そうした時は、お皿に魚油を入れて、木綿の芯に火をつけて明かりにしたということでした。全く同じ感じですね。

今藤：そうですね。

青柳：そうなのですね。そして飯場で花札ですか（笑）。当時は消灯時間は決まっていたのでしょうか。

今藤：大体決まっているの。10時には寝ろって言われるの。

青柳：そうなのですね。終戦間もなくの頃の飯場と言ったら、飯場長なんかが仕事をしている人たちに号令をかけて、厳しく生活を管理した、しごかれておっかなかったなどと聞きます。

今藤：そうでしょうね。（そうした厳しい役職は、飯場長ではなく）部屋頭がいて、一番えらかったので

す。

青柳：軍隊式で並ばされた、など聞きます。

今藤：そうですね。

青柳：楽しい思い出もあるのですね。

○木直しの仕事

青柳：その時の丸太運び（藪出し、木直し）の時の3人は日頃から親しいというか、チームワークで仕事をしたのでしょうか。

今藤：いや、そのチームというのはその日によって組み換えになるのです。

青柳：ああ、そうなのですね。

今藤：何日も一緒にやる場合もあるし、その日だけで終わる場合もある。

青柳：なるほど、その時の現場や仕事の内容によって、ですね。ずっと3人一緒というわけではなかったのですね。

今藤：うん。

青柳：そうしますと、現場ではどんな人と組んでも上手くやるような能力が求められたわけですね。

今藤：うん、その3人の中でね。トビ長と言っておったかな。トビを持ってね。あとの2人はガンタだった。

青柳：よく「木直しさん」と呼びますよね。

今藤：それが木直しなのです。

青柳：「トビ長さん」もよく言いますよね。

今藤：そう、その人は掛け声をかけて。

青柳：トビ長さんは年齢が上の人ですか。

今藤：そう。年齢が上だし、ある程度何年か経験を積んでる人だね。

トビ1人、ガンタ2人が1組だった。そして大きな丸太があったら、山頭や組頭が来て、「お前たちも一緒に手伝え」と言って、2組、つまり6人で仕事をしたりした。

青柳：そうなのですね。2組でもおやりになったのですね。

そうした大きい丸太もたくさんありましたか。道有林ですね。

今藤：結構ありましたよ。そういう風にしてアイヌの人たちの財産をみんな伐ってしまったんだと思う。

青柳：確かにね。北海道の良い木がそのようにして伐られていったのでしょうかね。

その時は、北山？ 智東の山でしたか。

今藤：僕はね。智東の山、ピヤシリに行った。

青柳：ああ、ピヤシリですね。今はスキー場もありますね。

今藤：ええ、あそこで随分仕事をしましたね。時によってはそっちの山。

青柳：智南ですね。近いですが、飯場ですから通いではなく、泊りでしたか？

今藤：うん。地元だけではお金が高くない（十分な稼ぎが得られない）もんだから、下川や中川に行ったこともあった。

青柳：そうですか。中川は遠いですよね。美深、音威子府、中川ですもんね。

今藤：うん。汽車で行ってさ。

青柳：汽車で行かれたのですね。それは二十歳を過ぎてからでしょうか。

今藤：そうだね。二十歳から 22～23 歳頃まで。

○運材の仕事

今藤：その後は自分の家から馬を連れて、山で集めた丸太を駅土場、木工場まで運ぶ仕事（バチバチを使った運材）をした。

青柳：それは下曳き、バチバチでした仕事ですか。

今藤：バチバチでね。馬を連れてね。

青柳：ああ、家で飼っておられた馬でしょうか。

今藤：自分の家の馬を連れてね。

青柳：その馬はいい馬でしたか。

今藤：うん、(馬は)色々おりますよね。力のある馬もいるし、誰かと同じで、ジャメで言うことをきかない、まじめにやらない馬もいる。

青柳：ジャメ馬ですね。それは普段、農耕馬として畑で働いていた馬を、冬山造材の現場でも使ったということですね。

今藤：そう。

青柳：(山) 土場から駅(土場) までですね。駅近くの木工場ですか。

今藤：木工場までね。そこで選別をしてね。自分の工場で挽く丸太、(鉄道で運搬して) 他へ売る丸太とを分ける。

青柳：今、駅とおっしゃったのは名寄駅ですか。

今藤：いや、智恵文駅。

青柳：智恵文駅ですか。

○智恵文駅と市街

青柳：智恵文駅は、今でこそ小さい無人駅ですが、昔はもっと大きかったのでしょうかね。

今藤：そうね。駅の職員も 7～8 人おったね。

青柳：それは立派な駅ですね。

今藤：うん。

青柳：それは木材を輸送するという(目的があった) 当時だからこそその賑わいだったのでしょうかね。鉄道が発達したのでしょうかね。

今藤：そうね。だから智恵文駅前に市街があつてね。

青柳：街ができていたのですね。

今藤：お店が 7～8 軒あつてね。

郵便局があつたり、警察の駐在所もあつたな。

青柳：そうですか。

○15 号台風

青柳：昭和 29 年に 15 号台風があつて風倒木の被害があり、その処理のために北海道では木材生産が盛

んになります。

今藤：ありましたね。

青柳：智恵文駅が賑やかだったのはその頃ですか。

今藤：僕はあんまり（その台風の）記憶がなかったけどね。覚えているのは台風の直後に層雲峡でね。当時は青年団に入っていたものだから。そこで研修会があって参加したことがあった。その時に見た光景では、山にマッチの棒を散らかしたように、たくさんの木が倒れていた。

青柳：層雲峡のほうは被害が大きかったのでしょうかね。

今藤：すごかったね。

青柳：その時は青年団で行かれたのですね。

今藤：うん。23～24歳の頃から青年団の会長になったりね。

青柳：そうなのですね。そちらの方面でも活発におやりになったのですね。

今藤：親もそのことには「うちは忙しいから仕事をしなければだめだよ」とは言わず、認めてくれました。

青柳：それは有難いことでしたね。地域の活動が大切だというお考えだったのだと思います。

○青年団活動

青柳：その頃の青年団活動には、どんな思い出がありますか。

今藤：そうだね。文化活動など、いろんな活動をしていたけれど、どこかの家で病気やケガをしまして、その家の農作業が遅れがちになったときに、「おーい」と号令をかけて1つの班、7～8人から10人位で草取りをしたり、エンバクを刈ったりなどして手伝った。こうした農作業の手伝いを朝2～3時間した。

青柳：ケガなどの事情で手が足りない家に対して、地域の青年団の仲間で奉仕活動をされたということですね。

今藤：そう。今そういうのはあんまりないよね。困ったときはお互いに助け合うべきだと考えて始めたことだった。みんなでやったもんですよ。

青柳：お金ではなく、手間、労力を提供しての地域の助け合いですね。

今藤：そう、だから、来てもらった家もお金を出すのではなく、せいぜいおにぎりを1個位出す程度で「ありがとさん」と労った。

青柳：お互いさまという意識だったのでしょうか。

今藤：うん、そうだね。

青柳：それは素晴らしい地域の助け合いですね。

○青年団の行事

今藤：それからね、演芸発表会をやったりね。

青柳：おお、演芸発表会ですか。

今藤：夏はね。智恵文には当時5～6つの青年団があったから、その対抗で運動会をした。走ったりね。

青柳：それは、青年団対抗の合同運動会ですね。大きくやられたのですね。

引用・参考文献

北海道開拓記念館 1977. 山に生きる. 北海道開拓記念館第16回特別展目録. 北海道開拓記念館.